

著者らが戦いの渦中にいた時、日産社長に就いていたのが石原俊（在任1977～85年）。石原は生産現場を支配し、経営に介入する塩路体制との対決姿勢を鮮明にした。反塩路派待望の戦う社長の登場だったが、他の役員たちは皆傍観を決め込んでいたという。労組の大反対に遭いながら、石原が計画した英国工場進出が成就するまでの秘話の数々も明かされる。

労組との戦い方を学ぶため、国鉄の職員局職員課長だった葛西敬之氏（現JR東海取締役名誉会長）を訪ねる場面もある。同氏は国鉄の現場を支配していた労組と戦いの前面に立ち、分割民営化を推進するキーマンの一人。国鉄と日産の労使関係は酷似していたのだ。

本書は30年数年前を舞台とするが、日産の現状を考えるうえで今日的意味を持つ。

塩路退陣で日産は経営のフリーハンドを手にしたはずだったが、業績は上向かず、ルノーからゴーンが救済にやってきた。しかし、19年に及ぶ統治の間にゴーンが今度は新たな絶対的権力者となり、自ら再建した会社から収奪を始めた。その不正が発覚して日産を去ることになり、同じ歴史が繰り返された形だ。

著者はゴーンが日産入りする数年前に退社。永守重信氏率いる日本電産に移り、M&A担当の取締役などを務めた。

文：M&A Online編集部